

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



36

よろこびの知らせ
第36集

目 次

苦しみに向かう	1
歴代誌第一 4:9~10	
心配してくださる神	10
ペテロ第一 5:7	
霊のいけにえ	19
ペテロ第一 2:4~5	
信仰・希望・愛	28
コロサイ 1:3~8	

ここに収められたメッセージは、2022年8~9月にテキサス州プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたものです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

苦しみに向かう

歴代誌第一 4:9-10

4:9 ヤベツは彼の兄弟たちよりも重んじられた。彼の母は、「私が悲しみのうちにこの子を産んだから」と言って、彼にヤベツという名をつけた。

4:10 ヤベツはイスラエルの神に呼ばわって言った。「私を大いに祝福し、私の地境を広げてくださいますように。御手が私とともにあり、わざわいから遠ざけて私が苦しむことのないようにしてくださいますように。」そこで神は彼の願ったことをかなえられた。

いただいた質問の中に、「苦しみに出会ったとき、それにどう向き合ったらいいでしょうか」というものがありました。「苦しみ」といっても、さまざまな苦しみがあります。病気の苦しみ、経済的な苦しみ、人間関係の苦しみ、また、いわれのないことで非難される苦しみなど、さまざまなものがあります。また、信仰者には神に向かって成長していくときの「成長痛」ともいえるような苦しみもあります。徹底してキリストに従った人たちは「キリストの苦しみ」にあずかるという体験もしています。そうしたことは、いずれまたお話しするつもりですが、きょうは、どんな苦しみであれ、それに会ったときに、私たちが第一にすべきことについて考えてみましょう。

一、神に求める

苦しみに出会ったときに、第一にすべきこと、それは神に助けを祈り求めることです。聖書はこう言っていま

す。「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」（詩篇 50:15）「あなたがたのうちに苦しんでいる人がいますか。その人は祈りなさい。喜んでいてる人がいますか。その人は賛美しなさい。」（ヤコブ 5:13）聖書は「祈り、求めよ」と教えています。そして、聖書には、神に祈り求めて苦しみから救われ、賛美に満たされていった人々の体験が数限りなく書かれています。ヤコブがそうでした。モーセがそうでした。ダビデがそうでした。イエスも、神の御子でありながら、私たちと変わらず、苦しみの中で父なる神に祈りました。ペテロもパウロも、イエスに従った人々は皆、苦しみに出会ったとき祈り、その祈りによって苦しみから救われたのです。

きょうの箇所の子ヤベツも神に祈り求めて、苦しみを乗り越えていきました。9節に「彼の母は、『私が悲しみのうちにこの子を産んだから』と言って、彼にヤベツという名をつけた」とあるように「ヤベツ」という名には「痛み、苦しみ、悲しみ」という意味があります。親が子どもにそんな名前をつけるなどは、現代のアメリカや日本では考えられないことですが、古代のイスラエルではあり得たことでした。ラケルが男の子を産んだ時、あまりの難産で出産後亡くなるのですが、その間に自分の子どもに「ベン・オニ」つまり「苦しみの子」と名づけたという例があります。もともと、父親のヤコブは「ベン・オニ」ではかわいそうだと思い、「ベン・ヤミン」（右手の子）という名前に変えています。この子が

イスラエル 12 部族のひとつ、ベニヤミン族の先祖になりました。

イスラエルでは父親が子どもに名をつけるのですが、ヤベツに名前を与えたのは母親でした。おそらく、ヤベツが生まれる前に父親が亡くなったからでしょう。ヤベツの母親は、夫を亡くした悲しみの中にあり、また、一家に夫がいない、父親がいないことから来る不利な状況の中にありました。ヤベツは逆境の中に生まれた「痛みの子」、「苦しみの子」、「悲しみの子」だったので

ある人は何の不自由もない豊かな家庭に生まれますが、ある人は食べるものにも困るような貧しい家庭に生まれます。ある人は家族が愛し合い助けあっている温かい家庭に生まれますが、ある人は問題だらけで冷たい家庭に生まれます。誰もが平等に生まれてくるわけではありません。心理学では、私たちの人格の大部分は幼児のころの家庭環境によって形づくられると言ひ、生物学では私たちがどんな病気になるかは遺伝子によって決まるとも言ひます。もし、それが本当だとしたら、私たちの人生のすべては生まれながらにして決定されていることになります。誰も、いつ、どこで、どんな両親から生まれるかを決めることはできません。何の選択もできませんから、多くの人、逆境とそこから来る苦しみにであつたとき、それを自分の「運命」だとあきらめるしかないと考えます。神を信じているという人の中にも、それは「神のおぼしめし」で変えられないことだと言う人

もあります。そうであれば、その人たちにとっての神は「運命」としての神でしかないわけで、そこから祈りは生まれません。祈りは物事を変えていただくことを願うものですから、運命を神としている人は祈ることができないのです。

しかし、ヤベツは、「イスラエルの神」、生きて、私たちの人生の中に働き、ものごとを変えてくださる神を信じ、神に祈り、求めました。ここで神が「イスラエルの神」と呼ばれているのは、イスラエルの十二部族の先祖になったヤコブに働きかけ、彼を助け、彼とその人生を変えてくださった神という意味です。ヤコブはさまざま苦しみの中を通りましたが、神に祝福を祈り求め、神はヤコブに「イスラエル」という新しい祝福名前を与え、ヤコブの生涯を変えてくださいました。ヤコブを祝福し、その人生を変えてくださった神を、ヤベツは信じたのです。ヤコブが神の祝福を熱心に願ったように、ヤベツも「イスラエルの神に呼ばわり」しました。信じて、熱心に祈り、求めました。そして、苦しみを乗り越えました。神は祈りを聞いてくださるお方、祈りに答えて、働いてくださるお方です。苦しみに出会ったときには、まず、神に助けを祈り求める。きょうの箇所はそのことを教えています。

二、制限を打ち破る

次に、ヤベツがどう祈ったかを見ましょう。彼は「私を大いに祝福し、私の地境を広げてください」と祈りました。

ヤベツの生きた時代は、イスラエルの十二部族に約束の土地が分割されたころでした。ヨシュアが大まかな割り当てを決めましたが、それは地図上のことであって、実際に土地を自分のものにするには、そこを開拓、開墾しなければなりませんでした。しかも、それをするのは「早いもの勝ち」で、それぞれの努力次第だったのです。しかしヤベツの家族は父親のいない、「やもめ・みなし子」の家庭、今で言えば「シングルマザー」の家庭でした。労働力も財力もありませんでした。他の人と競争に勝てるような状況ではありませんでした。ヤベツには他に兄弟がいましたが、彼が一番年若く、彼の受け取った土地はほんのわずかなものでしかなかったでしょう。しかし、ヤベツはそのことに甘んじませんでした。彼は「私の地境を広げてください」と祈りました。つまり、ヤベツは自分のリミット（制限）を打ち破る祈りをしたのです。

私たちは苦しみに会うとき、時として、自分のリミットだけを見て、「この苦しみは私のリミットを超えている。こんな苦しみには耐えられない」と思い込んでしまいます。確かに、誰にもリミットがあります。経済的なリミット、体力的なリミット、能力のリミットなど、さまざまです。もっとお金があつたら、もっと体力があつたら、もっと才能があつたらなどと嘆くことがあるでしょう。「他の人はあんなに恵まれているのに、なぜ神は私に同じものをくださらないのだろう」と、不満を持ったり、人を羨んだりすることがあるかもしれませ

ん。

人はそれぞれ違った境遇に、違った能力を持って生まれます。皆が平等に生まれてくるわけではありません。人生のスタートラインは始めから違っているのです。もしそうなら、神は不公平なのでしょうか。いいえ、決してそうではありません。神が私たちに何らかの苦難をお与えになる時には、必ずその助けも与えていてくださいます。多くの人は逆境にだけ目を留めて、そこに隠されている神の助けを見落としてしまうので、神は不公平だと言うのです。神は、より大きな苦難の中にいる者には、より大きな助けを与えてくださいます。ある面で欠けたところのある人には別の面で、それを補ってあまりあるものを与えられるのです。この神の助けを勘定に入れるなら、すべての人は神の前では平等な扱いを受けていることになります。恵まれた素質をもって生まれた人が、神の助けを求めず、惨めな一生を送ることもあれば、ハンディを持って生まれた人でも、神の助けを受け、満ち足りた人生を過ごすことができるのです。

自分で自分に制限を設け、「私はここまでしかできない」と決めてかかっているはいけません。リミットの中に安住してしまえば楽かもしれませんが、それは、神が与えようとしておられる助けを無視することになります。ヤベツは苦しみの中で「私の地境を広げてください」と祈りました。私たちも、同じように「私のリミットを打ち破ってください。リミットを広げてください」と祈ることができるのです。私たちにとって「地境を広げる」と

はどんなことなのでしょう。それは仕事において新しい分野に取り組むことかもしれません。日常の生活で陥りやすい失敗から、早く立ち上がることもできません。信仰の面では、より広く、深く、みことばの知識や理解を得ること、また、霊的にさらに成長していくことでしょう。大きな愛の心で他の人を包み込むことができるために、忍耐や寛容という内面の地境を広げることも忘れないようにしたいと思います。

三、神に信頼する

最後に、ヤベツが「御手が私とともにありますように」と祈ったことを覚えておきましょう。「神の手」ということばは、聖書では「神の力」と「神の祝福」を表わすのに使われます。ヤベツは「地境を広げてください」と祈りました。そのためにはもちろん彼自身の努力が必要でした。しかし、ヤベツは、自分の努力だけでそれが達成できないことを良く知っていました。それで、神の御手、つまり神の力と祝福を祈り求めたのです。ヤベツの祈りは、神の力に信頼する祈りでした。神への信頼こそが神の祝福を受ける第一歩だったのです。

一般に、ものごとに成功するためには「自分を信じろ」、「人に頼るな」などと言われます。しかし、大きな仕事を成し遂げた人々は、ほとんどといってよいほど、自信にあふれた人たちではなく、自分の弱さを知っている人たちでした。そして、その弱さをカバーしてくれる友人や協力者を持っている人たちでした。それと同じように、私たちが本当の意味で人生において成功した

いと願うなら、神に頼り、その力と祝福を受ける必要があります。あるビジネスマンが、成功の公式は

(才能) × (熱意) × (誠意)

だと言いましたが、私はさらにもうひとつのもの、神の祝福が必要だと思います。

(才能) × (熱意) × (誠意) × (祝福)

です。人間の側でどれだけ精一杯頑張ったとしても、そこに神の手が、神の祝福がなければ、ものごとは成就しないからです。また、たとい、表面ではものごとが期待どおりに行っているように見えても、神の祝福なしには、それが私たちの本当の幸いには結びつかず、他の人を幸いにするものにはならないのです。

私たちは、私たちの日常の生活の中にどれだけ神の御手を見ているのでしょうか。私たちの心に、神の御手のタッチを感じているのでしょうか。神は、いつも私たちと共にいてくださると約束しておられ、キリストを信じる者の内には聖霊が住んでおられるのに、日々の生活の中にも、私たちのたましいの内側にも、神の御手のわざを見ることがないとしたら、それは、神の御手を、意識して求めていないからかも知れません。ヤベツのように私たちも、生活の一こま、一こまで神に信頼し「御手が私とともにありますように」と祈りましょう。

ヤベツは、逆境の中に生まれました。一族の中で、また家族の中で一番小さな者でした。しかし、彼は、そのことを嘆くだけで終わりませんでした。神を呼び求めま

した。自分のリミットを広げてくださいと、神に願ったのです。そして、「ヤベツは彼の兄弟たちよりも重んじられ」るまでになりました。一番年若かった彼が兄たちや他の親族を凌ぐ者になったのです。

きょうの箇所には、苦しみに出会ったときに、そのまま祈ることができる具体的な祈りがあります。ご一緒に「ヤベツの祈り」を祈って、メッセージを終えたいと思います。

(祈り)

主なる神様、「私を大いに祝福し、私の地境を広げてください。御手が私とともにあり、わざわいから遠ざけて私が苦しむことのないようにしてください。」イエス・キリストのお名前です。

心配してくださる神

ペテロ第一 5:7

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

きょうは「思い煩いにどう対処したらいいでしょうか」という質問を受けましたので、それにお答えして、お話しします。

一、自分を責めない

まず、第一に、「思い煩う」とき、そのことで自分を責めないことです。

マタイ6章でイエスはこう言われました。「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。」（マタイ 6:25-26）確かにイエスは、ここで、「思い煩うな」と教えておられます。しかし、それは、食べ物や着る物に事欠いていた貧しい人々に語られたもので、イエスは人々が、食べ物や着物のことで心配するのを責めておられるものではありません。「空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。あなたがたの天の父がこれを養っていてくださる。だからあな

たがたにも必要なものを与えてくださる」と言って、人々を励ましておられるのです。

ルカの福音書では、この「空の鳥、野の花」のお話しは、「愚かな金持ち」の譬えの後で語られています。その「愚かな金持ち」はこう言いました。「こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」（ルカ 12:18-19）この金持ちは「思い煩い」や「心配」から無縁でした。では、イエスはこの人を褒めたのでしょうか。いいえ、この人は神の裁きを受けたと言っています。神を信じないで、自分の財産に頼って安心しきっていたことが責められているのです。そんなふうにならぬことよりも、身のまわりで起こるさまざまなことを心配してはいても、その心配を取り除いていただくために神に頼ることのほうがよほど良いとイエスは言っておられると思います。

神は私たちが思い煩い、心配するのを決してお叱りになりません。ですから、思い煩うとき、心配するときは、そのままの気持ちを神に申し上げるといいのです。詩篇 94:19 に、「私のうちで、思い煩いが増すときに、あなたの慰めが、私のたましいを喜ばしてくださいように」、また、詩篇 139:23 には「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください」との祈りがあります。そのように自分の「思

い煩い」や「心配ごと」を正直に神に話すなら、神は「思い煩い」に代えて、平安を与えてくださいます。ピリピ4:6-7にこうあります。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」この御言葉の通り、自分の心配ごとや願いを正直に神に祈るとき、今まであんなに心配でならなかったことが、もう心の重荷ではなくなって、自分で思いもしなかったような平安で心が満たされる、多くの人がそのような体験をしています。「思い煩ってはいけない」と言われると、「私は今、思い煩っていないだろうか」と言って、余計に思い煩う人もあります。思い煩いが心に満ちるとき、自分でそれをなんとかしようとするのでなく、思い煩いをそのまま神に告げましょう。聖書の約束の通り、神の平安があなたの心を守ってくれます。

二、他者を思いやる

もし、心配するなら、良い意味での「心配」に心向けるといいでしょう。他の人のことを心配することです。パウロは、ピリピの教会に「何も思い煩わないで、…」と書き送りましたが、そのすぐあとで、「私のことを心配してくれるあなたがたの心が、今ついによみがえって来たことを、私は主において非常に喜んでいます」（ピリピ4:10）と書いています。「心配」という言

葉は「心を配る」と書きます。人が互いに相手のことを心配しあう、それは必要なことであり、また、美しいことです。

私がサンディエゴに赴任して、最初に住んだ家のお隣りの方は、元警察官でした。あるとき、家内が鍵を持たずに外に出て、ロックアウトの状態になりました。私はそのとき教会にいたのですが、電話を受けて家に戻ると、家のドアが開いていました。隣の人が、台所で使う小さな道具でドアを開けてくれたというのです。さすがに元警察官で、そういう技術を持っていたのです。この鍵の話は、本題とは関係がないのですが、その隣の人のところに、娘さんが来ていて、しばらく滞在していました。娘さんが帰るとき、隣のご夫妻は、車に乗ろうとする娘さんを引き留めて、「気をつけてね。着いたら電話してね」などと言って、とても心配そうに、長く話していました。「アメリカ人の親子関係はさっぱりしていて、『バイバイ』と言って別れるだけだ。手を閉じたり、開いたりするのは、『早く行ってしまいなさい』と、人をせきたてる仕草なのだ」とは、よく言われますが、決してそうではないことを、私は何度も見聞きしてきました。どこの国でも同じで、親は子どものことで、さまざまに心配し、子どもが年老いた親のことを心配します。

キリスト者の間では、牧師が信徒のことを心配し、信徒が牧師のことを心配してきました。ヘブル 13:17には、教会の指導者が、教会員の「たましいのために見張りを

している」と書かれています。 「見張る」という言葉は別の訳で「配慮する」と訳されているように、「心配する」ことを意味しています。パウロは、自分が教え、導いてきた人たちのために、いつも祈り、また心を配っていました。パウロはコリント教会に宛てた手紙の中で、彼の使徒としての苦勞を数えあげていますが、その中で「このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。だれかが弱くて、私が弱くない、ということがあるのでしょうか。だれかがつまずいていて、私の心が激しく痛まないでおられましようか」（コリント第二 11:28-29）と言っています。ピリピの教会に対しても、「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、ほかにだれもいないからです」（ピリピ 2:20）と言って、テモテを褒めています。何があっても大丈夫という頑丈な人よりも、テモテのように、少し弱いところがあっても、他の人を思いやることができる心を持った人のほうが、主の働きにふさわしいとパウロは考えていました。 私たちもパウロやテモテのようでありたいと思います。

三、神の思いやりに委ねる

しかし、たとえ他の人のことであっても、あまりに心配しすぎて、神が見えなくなったり、御言葉を聞くことができなくなってしまったら、それは正しいことではありません。

ベタニヤのマルタは、イエスと弟子たちをもてなすた

めに忙しくし、妹のマリヤに手伝わせようとしたのですが、なんとということか、マリヤは男の弟子たちに混じってイエスのひざもとに座り、教えを聞いていたのです。そのときマルタは、マリヤにではなく、イエスに不満をぶっつけました。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」（ルカ 10:40）すると、イエスはこう言われました。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」（ルカ 10:41-42）

イエスは、もちろん、マルタひとりにそれをさせようとしたわけでもありませんでした。しかし、マリヤにはしばらくの間、イエスの教えを聞く必要があったのです。ほんとうはマルタにもそれが必要でした。イエスは、マルタやマリヤのもてなしを受ける前に、自分たちを迎えてくれた二人に「御言葉のもてなし」をなさりたかったと思われます。しかし、このときのマルタは、イエスの言葉のように、「心配し」、「気を使い」、御言葉に耳を傾ける余裕を失くしていたのです。

ここで「心配する」には **μεριμνάω**（メリナオー）という言葉が使われています。これは「不安になる」と訳すことができ、もともとの意味は、「心が分かれる」ことです。「気を使う」とあるところには **θορυβέω**（セオ

ルベオー)という言葉が使われ、これには「混乱する」という意味があります。イエスはマルタに「あなたは不安になり、混乱している」と言われたのです。「心配」が昂じると「不安」になります。「不安」が深まると「恐れ」になります。そして、「恐れ」から「パニック」が生じます。「イエスをもてなす」という、良い動機で働きはじめたのに、「あれもしなければ、これもしなければ」という思いに押しつぶされ、一時的ですが、マルタは、パニックに陥ってしまったのです。目の前にイエスを見ながらイエスのお心から離れてしまったのです。けれども、イエスに優しく諭されたあとは、きっと気持ちを取り戻し、マリヤと一緒に、イエスと弟子たちの世話に励んだだろうと思います。マリヤもマルタも、イエスの自分たちへの思いやりを知って、それに慰められ、励まされたに違いありません。

神は、心配が不安になり、思い煩いとなり、最後にはパニックになることを決して望んではおられません。聖書は私たちに「思い煩うな」、「心配するな」、「恐れるな」と教えていますが、そこには、すべて、「神があなたを支える」、「あなたを導く」、「あなたと共にいる」との約束が伴っています。きょうの箇所、ペテロ第一5:7にこうあります。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」私たちが思い煩わなくてよいのは、神が心配してくださるからです。ここで「心配する」と訳されている言葉は μέλω (メロー) で「心に向け

る」という意味があります。じつは、マルタが「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか」と言ったとき、この μέλω（メロー）という言葉を使っています。マルタは、イエスに「私のことを心にかけておられないのですか」と言いましたが、イエスはマルタのことを心にかけておられなかったのでしょうか。もちろん、イエスはマルタのことも、マリヤのことも等しく心にかけておられました。イエスが「マルタ、マルタ」と彼女の名を二度も呼びました。それは、感情的になっていたマルタを落ち着かせるためだったでしょうが、同時に、イエスがどんなにマルタのことを心にかけておられたかをも、言い表していると思います。

男の弟子たちも、マルタが使ったのと同じ言葉、「何とも思われないのですか」と言ったことがあります。舟がガリラヤ湖で嵐に遭って沈みそうになりました。弟子たちが慌てふためいているのに、イエスは眠っておられたのです。弟子たちは、「先生。私たちがおぼれ死にそうでも、何とも思われないのですか」（マルコ 4:38）と叫びました。もちろん、イエスが「何とも思われない」、「心にかけておられない」、「心配しておられない」わけがありません。イエスは起き上がって、嵐を叱り、湖に「黙れ。静まれ」と命じ、嵐を鎮めました。イエスは絶えず弟子たちを心にかけておられ、湖の嵐を鎮めるとともに、弟子たちの心の嵐、恐れをも静め、心配や思い煩いを取り除いてくださったのです。

私たちの神は、私たち一人ひとりを心にかけて、心配してくださり、必要を備えてくださる神です。私たちの主は、恐れ of 嵐を平安に変えてくださるお方です。この神に、この主に、思い煩いを委ねましょう。聖書に「いっさい」とあるように、どんなことでも、すべてを申し上げて、委ねるのです。神が、私たちのことを心配してくださるからです。

(祈り)

父なる神様、あなたは肉親の父、母にまさって、あなたの子どもたちを愛し、守り、養ってくださいます。私たちを、常に心にかけて、心配してくださいます。私たちが、日々に、あなたのお心をイエスから学び、聖霊に助けられ、あなたに信頼して歩むことができるよう、導いてください。主イエスのお名前です。

霊のいけにえ ペテロ第一 2:4-5

2:4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。

2:5 あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

この箇所に「神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい」とありますが、「霊のいけにえ」とは何を指しているのでしょうか。私たちは、神に何をささげることができるのでしょうか。きょうはそのことについて話します。

一、旧約のささげ物

それを理解するためには、旧約時代の礼拝がどういうものだったかを知るのが役に立ちます。聖書で最初に「ささげ物」について書かれているのは、創世記4章、「カインとアベルのささげ物」の記事です。カインは農作物、おそらく、穀物をささげ、アベルは家畜の中から小羊をささげました。神はカインのささげ物でなく、アベルのささげ物を喜ばれました。それはカインのささげ物が穀物で、アベルのささげ物が動物だったからでしょうか。そうではありません。カインが不承不承ささげ物をしたのに対して、アベルは心を込めてささげ物をしたからです。聖書に「アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主

は、アベルとそのささげ物とに目を留められた」（創世記4:4）とあるように、神はささげ物とともに、ささげ物をする人の心をご覧になるのです。

このようにささげ物を焼き尽くして神にささげるという形の礼拝は、ノアに引き継がれました。アブラハムもイサクもヤコブも行くところ、行くところに祭壇を築き、供え物をささげて神を礼拝しました。

モーセの時に、最初の神殿が建てられました。神殿の中心は「契約の箱」でしたが、それは誰もが近づくことができるものではありませんでした。一般の礼拝者が近づくことができたのは「祭壇」でした。人々はそこに供え物を持って行き、祭司の手を通してそれを神にささげました。動物のいけにえや穀物のささげ物が焼かれ、煙が空に上っていく様子を見つめながら、人々は、罪の赦しと祝福を祈りました。煙が空に上っていくように、自分たちの祈りもまた、天の神のもとに届けられるようにと願い、神を礼拝しました。

旧約時代には、礼拝には必ず、具体的な「ささげ物」、とくに生きた動物の「いのち」が必要でした。けれども、人々は、なぜそれが必要なのか、それが何を意味しているのか、また何を指し示しているのかを、理解してはいませんでした。

二、キリストのささげ物

しかし、救い主イエス・キリストが世に来られ、十字架でいのちをささげられたとき、それまで隠されていたささげ物の意味が明らかになりました。旧約時代のささ

げ物は、イエス・キリストの十字架での身代わりの死を指し示すものだったのです。

バプテスマのヨハネはイエスを観て、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハネ 1:29）と叫びました。それは、聖霊による預言で、イエスをそう呼んだヨハネ自身も、そのすべてを理解していたわけではありませんでした。しかし、イエスの弟子たちは、イエスと共に生活し、イエスの教えを聞き、十字架を目のあたりにし、復活されたイエスに出会い、イエスから聖書を解き明かしていただいて、バプテスマのヨハネが言った言葉の意味を理解しました。イエスが、じつに「世の罪を取り除く神の小羊」であることをはっきりと分かったのです。イエスは「供え物」の小羊として十字架という祭壇の上で命をささげてくださいったということを理解したのです。

使徒ヨハネは、その手紙の中にこう書いています。

「この方こそ、私たちの罪のための、——私たちの罪だけでなく全世界のための、——なだめの供え物なのです。」（ヨハネ第一 2:2）また、こうも言っています。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」（ヨハネ第一 4:10）神が、この「なだめの供え物」は私たちがささげたものでも、私たちが願ったものでもありません。私たちが神も、救いの道も知らなかった時から、神が私たちのために備えてくださったものでした。神と人とが一つと

なることができるための「なだめの供え物」を備えてくださっていたのです。それは神の私たちへの深い愛によるものでした。

旧約時代、人々は祭壇にささげる動物の頭に手を置き、それから動物を屠って、神にささげました。「手を置く」のは、罪を動物に移すことを意味していました。犠牲となる動物は人の罪を背負って死んでいきました。それと同じように、いや、それ以上のものを与えるために、イエス・キリストは、人間の罪の身代りに十字架でいのちをささげられたのです。

動物の犠牲が与えるものは限定的で、一時的です。そこで与えられる罪の赦しは、その人が犯した具体的な一つの罪に限られており、しかも永遠にはありません。動物の血は儀式的なきよめを与えても、人の心まできよめることができません。人はくりかえし同じ罪を犯し、何度も同じささげ物をささげ直さなければなりません。しかし、イエス・キリストの場合は違います。イエス・キリストはすべての人の、あらゆる罪を、引き受け、十字架によって、ただ一度限り、すべてを赦し、ご自分の血によって私たちの心までもきよめてくださったのです。

ヘブル 10:11-14 にこう書かれています。「また、すべて祭司は毎日立って礼拝の務めをなし、同じいけにえをくり返しささげますが、それらは決して罪を除き去ることができません。しかし、キリストは、罪のために一つの永遠のいけにえをささげて後、神の右の座に着き、そ

れからは、その敵がご自分の足台となるのを待っておられるのです。キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。」

「一つの永遠のささげ物」、それはイエスご自身、イエスのいのちです。この言葉は、私たちに大きな平安を与えてくれます。もし皆さんがローンを組んで何か大きな買い物をしたとします。毎月の支払いが苦しくなり、支払いをスキップしてペナルティがついたり、利息が膨れ上がったりしてどうにもならなくなったとき、誰かが代わりにすべてを支払ってくれたとしたら、もう、その瞬間から、今月のことも、来月のことも心配なくて済むようになるのです。借金から自由になります。そのように、キリストのささげ物は私たちに「一度限り」、「永遠に」罪の負債から救い出してくださったのです。キリストの「ささげ物」はすべてをカバーし、すべてを新しくする完全な「ささげ物」です。

三、新約のささげ物

では、キリストの「ささげ物」がすべてをカバーするのなら、新約時代の私たちには、礼拝でささげるものはもう何もないのでしょうか。いいえ、聖書は、「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい」（5節）と教えています。これは、私たち自身が神殿であり、また祭司であり、さらに、ささげ物、そのものでもあることを教えています。

ローマ 12:1 に「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」とあります。殉教者たちは、実際にその「からだ」をささげました。パウロは常に殉教を覚悟していて、「たとい私が、あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに、注ぎの供え物となっても、私は喜びます。あなたがたすべてとともに喜びます」（ピリピ 2:17）と言っています。しかし、ローマ 12:1 ではキリストのために「死ぬ」ことではなく、キリストのために「生きる」ことを教えています。「生きた供え物」とあるように、「からだ」をささげるとは、自分の頭脳や、耳や口、手足を使って、神に仕えることを意味しています。ローマ 12 章の続く部分で、「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい」（11-13）と言っている通りです。ローマ 12:1 で「からだを…ささげなさい」というのは、からだを使ってする一切のこと、言い換えれば、日々の生活のすべてを神にささげること、神を喜び、神に喜ばれることを目指して生きることを意味しています。

イエスは、大祭司として世に来られました。祭司には「ささげ物」が必要でした。しかし、イエスはどんなささげ物も持たないで世に来られました。それは、ご自分が「ささげ物」だったからです。このキリストによって

祭司とされた私たちもまた同じです。キリストは私たちにも、「自分をささげなさい。あなた自身がささげ物なのです」と言われるのです。救われた私自身、それが神に喜ばれる「霊のいけにえ」なのです。

「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」この言葉で、私たちがささげるべきものがすべて言い尽くされているのですが、聖書はなお二つのことを加えます。ヘブル 13:15 には「ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか」とあります。

「賛美のいけにえ」、それは、動物のささげ物に代わってささげられるものです。ここで言われている「賛美」とは、賛美歌やゴスペル・ソング、またワーシップ・ソングではありません。一世紀の教会では、「詩篇」が歌われました。また、聖書の言葉や、信仰告白も歌われました。そうしたものが「賛美」と呼ばれました。また、祈りがメロディを伴ってささげられるようになったもの、それは「霊の歌」と呼ばれました。ですから、私たちが礼拝で行っている詩篇の交読、使徒信条の告白、また、祈り、聖書の朗読も、賛美の歌とともにささげる「賛美のいけにえ」、「御名をたたえるくちびるの果実」になるのです。このような「賛美のささげ物」を日々ささげ、主の日には皆で、さらに力強くささげたいと思います。

もう一つのことは 16 節にあるように、「善行」と「分

かち合い」です。「善を行なうことと、持ち物を人に分けることとを怠ってはいけません。神はこのようないけにえを喜ばれるからです。」「善を行なうことと、持ち物を人に分けること」、これも神への「ささげ物」です。パウロはピリピの教会から援助を受けたとき、こう言いました。「あなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。」（ピリピ 4:18）援助や親切は「人」に対してすることなのですが、神はそれを「わたしにしたことだ」と言ってくださるのです。しかも、神は、どんなに小さなこと、わずかなものであっても、心からしたことを喜んでくださいます。「分け与える」ことの中には、人の話を聞く耳を与える、励ましの言葉を与えるということも含まれます。現代は、実際の「物」よりも、他の人のために「心」を配り、「時間」を割くことのほうが必要なのかもしれませんが。ヘブル 6:10 にこうあります。「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。」この言葉に励まされて神に喜ばれるささげ物をしたと思います。

キリストがご自身を「ささげ物」としてくださった。この恵みによって、私たちも、自分自身を「ささげ物」とすることができます。神をたたえる言葉を語り、援助や親切を神への「ささげ物」として実行していきたいと思えます。

(祈り)

主なる神様、あなたは私たちをあなたの祭司とし、「霊のいけにえ」をささげる者としてくださいました。あなたから与えられた務めを思うとき、果たして自分にそんなことができるのだろうかと心配にもなります。しかし、私たちには大祭司であるイエスがおられます。主を見上げ、主の教えを聞き、主に倣いながら、私たちは善を行うことを怠らず、励みたいと願います。私たちを導き助けてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。

信仰・希望・愛

コロサイ 1:3-8

1:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。

1:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。

1:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。

1:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそうにしてあなたがたに届いたのです。

1:7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、

1:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。

一、パウロとコロサイの人々

コロサイ人への手紙は、1-2 節の挨拶から始まっています。「神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」

日本の手紙は「拝啓」で始まり「敬具」で閉じます。本文が終わってから、差出人の名前を下に、受取人の名前を上の方に書きます。相手を高め、自分をへりくだら

せるのです。日本の手紙では、最後まで読まないで、誰から誰への手紙か分かりませんが、パウロが手紙を書いた1世紀のローマでは、手紙の最初に差出人と受取人の名前を書くのが普通でした。ここでも「パウロからコロサイにいる聖徒たち、忠実な兄弟たちへ」とありますが、この形式は「わたし、からあなた、へ」と、差出人の受取人への愛情を表現しているのです。

パウロはエペソという大きな町で伝道し、そこで毎日福音を宣べ伝え、聖書を教えていました（使徒 19:9-10）。人々がエペソに来てパウロから学び、それぞれ、自分の町に帰って、そこで福音を宣べ伝えるようになりました。エペソから内陸に150マイルほどのところにコロサイの町がありました。今でなら車で3時間もかからずに行けますが、当時は歩いて3~4日はかかったでしょう。そこからエパfrasという人が来てエペソに滞在し、パウロから聖書を学んでいました。エパfrasは、自分の町、コロサイに帰り、そこで福音を伝えました。そうして、コロサイの町にも、教会が生まれました。7節に「これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです」とあるのは、そのことを言っています。

パウロは、このコロサイの人たちを「兄弟たち」と呼んでいます。パウロは、エパfrasは知っていても、エパfrasの伝道によってクリスチャンになった人たちとは顔を合わせていないのです。そうなのに、まるで子どもころから一緒に育ってきた兄弟姉妹のように、親し

みを込めて「兄弟たち」と呼んでいます。それは、神の御子であるイエス・キリストを信じる者が父なる神の子どもとされ、お互いが兄弟姉妹になるからです。お一人の父なる神のもとに、一つの神の家族とされている。国境を超え、人種や民族を超え、また、時代さえも超えてです。「キリストにあって一つ」となるところ、それが「教会」なのです。今日、「分断」という言葉がやたらと使われるようになりましたが、「分断」が癒やされるのは、「キリストにあって」です。キリストにあって、聖霊による真実な愛に導かれることによってだと信じています。

二、パウロの感謝

さて、パウロがコロサイの人々のことを聞いて、最初に口にしたのは「感謝」という言葉でした。3節に「私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています」とある通りです。

私たちが神にささげる祈りには「賛美」、「感謝」、「悔い改め」、「願い」、「とりなし」が含まれます。神の素晴らしさをあがめる「賛美」、神がくださった恵みや祝福への「感謝」、神を悲しませるようなことをしてしまったことへの「悔い改め」、神にかなえていただきたい「願い」、他の人の幸いを祈る「とりなし」。祈りには、そうした要素がありますが、その中で、忘れていけないのは「感謝」です。

パウロは、ローマで囚われの身となっていた自分をエパ

フラスが訪ねてくれたことを感謝しています。けれども、それはエパフラスひとりでできたことではありません。コロサイからエペソまで出て、エペソから船に乗り、ローマに向かうのは生涯のうちに一度あるかないかの「大旅行」でした。大変な時間も、費用もかかったことでしょう。それをサポートしたのはコロサイのクリスチャンたちでした。自分たちの指導者が長い間コロサイを留守にするのは、人々にとって大きな痛手でしたが、コロサイの人々は、そうした犠牲をも惜しまなかったのです。パウロはそのことを感謝して、コロサイの人々に宛ててこの手紙を書きました。

人から受けた親切を感謝で返す。それはとても美しいことです。それによって人の心は豊かになります。家族や親しい間がらでは、「してもらってあたりまえ」という気持ちになることもありますが、いつも、お互いに「ありがとう」と言いあって過ごすことができたなら、お互いの関係はどんなに良くなることでしょう。それは自分にも相手にも祝福を与えます。

パウロはコロサイ 3:15-17で、こう言っています。「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、《感謝》の心を持つ人になりなさい。キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、《感謝》にあふれて心から神に向かって歌いなさい。あなたがたのすることは、ことばに

よると行ないによつとを問はず、すべて主イエスの名によつてなし、主によつて父なる神に《感謝》しなさい。」1節ごとに「感謝」という言葉が出てきます。パウロがこうしたことを書くことができたのは、パウロ自身が「感謝の心を持つ人」だったからでしょう。

私たちは、自分が不平や不満を持っていると感じるとき、「感謝しなければ…」と思ひなおして、感謝しようと努力します。努力は良いものです。もし、神を信じ、キリストに従うということが、「私はこうすべきなのだ」と自分に圧力をかけることだけであるなら、信仰生活から喜びがなくなります。「こんな時はこうしなければならぬ」ということに従うだけなら、それは「行動主義」(Doing)の世界で生きることになります。それが極端になると、「こうしなければならぬ」ということが「律法」になり、「感謝する」という良いことが、それができない自分を責める重苦しいものになってしまいます。しかし、聖書が教えるのは、「感謝の心を持つ人になる」(Being)ことを教えています。「感謝の心を持つ人」になれば、おのずと感謝が捧げられるようになります。キリストによつて私たちの存在(Being)が変えられ、変えられた存在(Being)から行動(Doing)が生まれて来るのです。これが信仰の歩み、本当の感謝への道です。

三、信仰・希望・愛

パウロが感謝したのは、コロサイの人々が、自分のためにエパfrasを送ってくれたことでしたが、それと同

時に、コロサイの人々に与えられた神の恵みを感謝しています。その恵みとは、「信仰」と「希望」と「愛」です。4-5節にこうあります。「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの《信仰》と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている《愛》のことを聞いたからです。それらは、あなたがたのために天にたくわえられている《望み》に基づくものです。」同じような言葉は、テサロニケのクリスチャンに宛てられた手紙の中にもあります。「私たちは、いつもあなたがたすべてのために神に感謝し、祈りのときにあなたがたを覚え、絶えず、私たちの父なる神の御前に、あなたがたの《信仰》の働き、《愛》の労苦、主イエス・キリストへの《望み》の忍耐を思い起こしています。」（テサロニケ第一 1:1-2）コロサイのクリスチャンにも、テサロニケのクリスチャンにも「信仰・希望・愛」の恵みが与えられていました。それはすべてのクリスチャンに共通したものの、クリスチャンの「ブランド・マーク」です。

「信仰」と「希望」と「愛」、これは、当たり前のことですが、人間だけに与えられたものです。人間だけが「神のかたち」に造られたからです。「神のかたち」とは神を表すものです。ということは、神が「信仰」と「希望」と「愛」を持っておられるもので、神が人間に分け与えてくださったものであることを教えています。神は「愛」の神です。私たちが神を愛する以前に、まず、神のほうから私たちが愛してくださいました。そして、人間がそれに応えることができるために、人にも

「愛」をお与えになったのです。また、神は真実なお方であり、私たちに真実を尽くしてくださいました。言い換えれば、神が人を信じてくださったのです。人が神を信じるのであって、神が人を信じるというのは、逆ではないかと思われそうですが、そうではありません。聖書では、神の「真実」を表す言葉と、人の「信仰」を表す言葉はく同じ言葉を使います。つまり「信仰」とは、神の神の真実に、人の真実をもって応えることなのです。

「希望」についても同じことが言えます。キリストによる救いは、じつは、人がそれを望んだので、神がその願いに応じてお与えになったものではありません。人の救いを「望み」、計画され、実行されたのは神です。人々は、「救いなんかいらぬ」とうそぶいていたのです。神は、そんな人間が自分に救いが必要なことに気付いて、救いを求めるようになるのを、神は忍耐深く待っていてくださるのです。

「信仰」も「希望」も「愛」も、神から出て、人に与えられたものです。罪によって「神のかたち」を傷つけ、失ってしまうことによって「信仰・希望・愛」をも失ってしまったのです。神は、イエス・キリストによって、もういちど「神のかたち」を取り戻すことができるようにしてくださいました。パウロがコロサイのクリスチャンの「信仰」と「希望」と「愛」について聞いたとき、それを感謝せずにはおれなかったのは、コロサイの人々がキリストを信じて、救われ、神のかたちを回復し、人が本来もつべき「信仰」と「希望」と「愛」を得たから

でした。

コリント第一 13:13 に「いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です」とあります。その通りです。地位や名誉、財産は多くの人が求めているものですが、そうしたものは「いつまでも残るもの」ではありません。時間が経てば消えていくものです。それは地上だけのもので、天にまで持っていくことはできません。しかし、信仰と希望と愛は永遠です。「信仰の働き」、つまり、信仰をもって行ったこと、「愛の労苦」、つまり、神や人のために払った犠牲、そして「望みの忍耐」、つまり、神からの報いを待ち望んで耐え忍んだことは、すべて、天で報われます。今、私たちは、肉眼でイエス・キリストを見ることはできませんが、神の言葉に導かれ、心にキリストの姿を描き、信じ、従っています。そのような人は、天でイエス・キリストにまみえることができます。この世で愛のゆえに払った犠牲のすべては天で報われます。神ご自身が報いてくださるのです。神の国を待ち望んで生涯を送った人は、その成就を見るようになります。天で、信仰は完成し、愛は報われ、希望は成就するのです。

私たちは、まず、なによりも、「信仰」と「希望」と「愛」を頂いていることを大いに感謝しましょう。そして、「信仰」と「希望」と「愛」によって、人々に神の真実、忍耐、そして愛を証ししたいと思います。やがて天で、信仰の働き、希望の忍耐、愛の労苦の報いを受け取りたいと思います。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、私たちに「信仰」と「希望」と「愛」をお与えくださいました。あなたに造られ、「神のかたち」を回復していただいた者として、「信仰」と「希望」と「愛」によってあなたを表すことができますよう助けてください。「信仰・希望・愛」によって、多くの方があなたに感謝をささげることができますよう、助け、導いてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。



Penguin Club
www.penguinclub.net